

その男は、総理大臣になれたかもしれない

明治時代に新政府の要職を歴任した品川弥二郎。彼はある時こう聞かれました。「松下村塾で一番優れていたのはどなたでしょうか?」「そりゃ吉田稔麿が一番じゃ。生きて今頃おるなら、据え置きの総理大臣じゃろ。次は杉山松助、こりゃ大蔵大臣。久坂玄瑞は万能、高杉晋作は奇智に長け、前原一誠は勇。入江九一に寺島忠三郎、彼らもすごかった。まずこの7人が優れちよるね。その中でも、吉田は飛び抜けて素晴らしかった」……この7人を整理してみましょう。

吉田稔麿：元治元年（1864年）「池田屋事件」にて殺害、享年 24

杉山松助：元治元年（1864年）「池田屋事件」にて殺害、享年 27

久坂玄瑞：元治元年（1864年）「禁門の変」にて自刃、享年 25

高杉晋作：慶応3年4月14日（1867年）病死、享年 27

前原一誠：明治9年（1876年）、「萩の乱」により刑死、享年 42

入江九一：元治元年（1864年）「禁門の変」にて戦死、享年 28

寺島忠三郎：元治元年（1864年）「禁門の変」にて自刃、享年 21

なんと、7人中6人が明治維新を見ることなく、しかもそのうち5人が元治元年（1864年）に死亡しております。中でも優秀だった二人が散った「池田屋事件」。長州藩としては、貴重な人材を失った事件だと改めてわかります。

「松下村塾」四天王

「松下村塾」で吉田稔麿は、高杉晋作、久坂玄瑞の次に優秀で「三秀」とも称された若者でした。もう一人、入江九一を加え「四天王」ともされます。

吉田は天保12年（1841年）、長州藩の士族（さむらいやとい・準士）である吉田清内の長男として生まれました。

幼い頃、近所に引っ越して来た伊藤利助（のちの伊藤博文）とは幼なじみで、ともに学び、遊んだ仲です。嘉永6年（1853年）、父のあとについて江戸に勤めた吉田は、おそるべき事態に出くわします。黒船来航です。

数え13才の若さで黒船を目の当たりにした吉田は、このままでは国が危ういと、攘夷思想に目覚め、安政3年（1856年）に帰藩すると、吉田松陰の松下村塾へ入塾。たちまち塾生の中でも頭角を現すのでした。

師の松陰とも良好な関係を保っていた吉田でしたが、しかし、これは長続きしません。政治情勢に失望した松陰は、老中・間部詮勝の暗殺を計画するなどの暴走を始め、吉田も距離を置き、ついに絶縁してしまうのです。師の松陰が江戸に送られるとき、遠くからそっと見送るほかありません。そしてそのときの姿が、師弟にとっては永別となるのでした。